ヨーガ・ヴァシスタ：聖者ヴァシスタの教え　プレマナンダジ講話③－１

2024/4/1

真理についての“相対的”理解

私たちは、さまざまな角度から念入りに、真理の相対的な理解について議論しています。真理についての“相対的な”理解です。注意深く理解してください。私たちが何を議論し、分析し、考え、話し、聞き、何をするにしても、それは相対性の法則の下にあります。

2つのものがあると、相対性の法則が起動します。絶対的な1つのものとして私たちが理解するもの、あるいは絶対的な真理として私たちが受け入れるものは2つ目のない1つで、表現できないものです。なぜなら、表現にはサポートが必要だからです。表現はプロセスです。プロセスは、それが二元的の世界の二元論的な法則の下にあることを意味します。

あなたが何かを表現したり、何かを理解しようと試みた瞬間に、それは真理ではありません。

それは、相対的に真理に近づいているにすぎません。真理への接近で、真理ではありません。

私たちがいつも議論しているのはこの方法です。

相対するものを比較して確認する

どこへ行っても、何をするにしても、生きている間中、私たちは相対するペアの中にいます。私に顔があって正面があるなら、背中もあります。私は見ることができるなら、見ないこともできます。話すことができれば、話さないで静かにしていることもできます。あらゆる分野の至るところに反対のものがあります。

今、昼を見ているなら、夜があるということです。夜を知らなければ、夜と比較しなければ、昼とは何かを理解することはできません。昼と言った瞬間、夜が何かを知っていることを意味します。そして、昼をそれ（夜）と比較して、これが昼であることを確認します。

比較しなければ、確認できません。これが法則です。比較しなければ、確認はありません。

1つしかなければ、表現の必要はない

絶対的な1つについては、確認や比較の必要はなく、理解や誤解、受け入れか拒絶かといった疑問もありません。疑問があるのは、2つのものがある時だけです。

例えば、たった1人で人のいないところに座っている時には、自分の名前、住所、自分は誰なのか、どこにいて何をしているのか等、自分を表現する必要はないでしょう。あなたは１人なので、どのような表現も必要ありません。あなたは自分の存在を認識しています。表現が必要になるのは、2人目が現れた時です。

もし誰かが来て、「そこに座っているのは誰ですか？」と尋ねたら、その時には自分を表現しなければなりません。「はい、私です！座っているのはスワミジです。瞑想していたので、暗闇の中に1人で座っています。」

これらの表現は全て、他の人がいる時にだけ必要です。2人目が現れると、これらの表現が必要になります。そうでなければ、1つのものは常に1つで、1つであることの証拠は必要ありません。1つはそれ自体で証明されます。証明書やサポート等は必要ありません。2つ目が現れた瞬間に、比較、サポート、つまり一方が他方によって支えられること、関係性、比較、これら全てが始まります。

本当の意味で１人になる

参加者からの質問：１人になった時でも、心が働いているのではないですか？

はい、心は働きます。心は働きますが、心は何かを表現しますか？

心の行動を表現として捉えたら、１人にはなれないと言わざるを得ません。

私があなたに言ったのは、あなたは人から離れた場所にいて、時間、空間的に1人である条件が揃っているということです。相対的にあなたは1人だと理解されます。でも、あなたは1人にはなれません。あなたは１つではないからです。あなたが1人になるのは、あなたの心、知性、体、プラーナ、感覚、全てがサマーディの中で静かに保たれている時だけです。その時に初めて、あなたは1人になります。心がなく、機能がなく、行動がなく、反応もなく、何もありません。それが本当の意味で1人になることです。しかし、私たちが今話していることは、場所や人々との比較による相対的な孤独です。心は働いています。

疑問や知識は相対的世界にある

参加者からの質問：本当の意味で1人になると、疑問もなくなるのですね？

はい！疑問はありません。疑問も答えもありません。そして、機能も行動も確認もありません。疑問を超えています。疑問が生じると、全てが始まります。私たちが何を言おうと、何を理解しようと、何を聞こうと、何を感覚器官で感じようと、全ては相対性の法則の下のことです。

あなたが何かを学んだり、何かを聞いたり、何かを理解したり、理解しようとしたり、 知識や理解を高めようとしたりしているとしたら、これらは全て相対性の法則の下のことです。

2種類の知識

私たちが知っていることは全て知識ですが、知識には2種類あります。1つは**相対的知識**、つまり情報の知識で、変化します。2年前よりも、今のあなたはたくさんのことを知っています。あなたの知識は増えて、強化されています。この知識には増減があります。忘れることもあります。たくさんの新しいことを覚えたり、知ることもできます。相対的知識は、変化します。

一方で、決して変わらない知識、それが**絶対的知識・経験的知識**です。一度ジャガリー（サトウキビ糖）を味わったら、一生忘れることはありません。しかし、その味を正確に表現することはできません。

小さくてとても辛い唐辛子を味わったことがありますか？非常に小さな唐辛子ですが、舌の上に小さな欠片を置いただけで、やられてしまいます。バイブレーションを感じて、クンダリーニが目覚めるほどです(笑)。

これはクンダリーニを目覚めさせる簡単な方法かもしれません（笑）。

一度味を体験したら、一生忘れることはできません。これを経験といいます。これは決して減りもせず、増えもしません。経験的知識と呼ばれます。これは増減のない真の知識です。

情報の知識だけが、変化します。今日知っていることが何であれ、明日は何か別のことを知るでしょう。今日の知識は間違っているのです！明日の知識が正しい知識なのです。

変化する知識

どのように情報の知識が変化するかについて、ある例をお話ししましょう。私の子供の頃の話です。私が知っているのは自分のことだけなので、私の知識についてお話します。

子供の頃、空は屋根だと思っていました。ガラスでできた半円の透明な屋根です。そして、星は全て、偉大な聖者や賢者だと考えていました。北極星の話を聞いたことがあったからです。北極星はドゥルヴァと呼ばれていて、不変のもの、絶対的な不変を意味します。それは決して昇らず、決して沈まず、常に決まった場所にあります。

北極星（ドゥルヴァ）の物語

この星にまつわる物語があります。あるところに王子がいました。彼は父親の膝に座りたいと思っていましたが、継母の息子、つまり異母弟がいつも座っていて、この王子は王様の膝の上に座ることができませんでした。彼は「なぜぼくはお父さんの膝の上に座れないの？」と駄々をこねました。まだ小さな男の子です。
彼は母親のところに行き、理由を尋ねました。母親は、「神様があなたの運命をそう作られなかったからよ」と言いました。それを聞いた彼は、「神様はどこに住んでいるの？なぜぼくの運命をそのようにしなかったのか尋ねてみたい。」と言いました。母親は、「神様はジャングルに住んでいるのですよ」と、その場しのぎの適当な返事をしました。彼はその言葉に刺激され、ジャングルに行って神様に、自分の運命をこのように作られた理由を尋ねなければ！と考えました。
王子は真夜中に起きて、誰の許可も得ずにジャングルに行きました。そしてジャングルで、神を探しました。純粋な心を持った小さな男の子です。神はジャングルに住んでいると思っているので、動物、鳥など、出会ったもの全てに「あなたは神様?」「あなたが神様なの?」と尋ねました。
彼は野犬やヒョウや熊にも近づいて尋ねました。彼の心がとても純粋で、誰も差別しなかったので、誰も彼に危害を加えませんでした。彼はジャングル中で神を探し求めましたが、返事は得られませんでした。

天の修行僧であるナーラダは、創造主の息子で、大変力のある存在です。彼は全宇宙を旅して自然を楽しんでいました。この子供は彼がそばを通り過ぎた時にも「あなたは神様なの？」と尋ねました。ナーラダは、「私は神様ではないよ。君はどうして神様に会いたいの？なぜ神様を探しているの？」と聞きました。
「どうしてぼくの運命をこう作られたのか、神様に聞きたいんだ。」「そうか。でも、この方法では神様は見つからないよ。私が会える方法を教えてあげよう。私の言う通りにできるかな？」純粋なその子は、「はい、やります！どうすれば神様に会えるか教えてください。」と答えました。
ナーラダは彼にマントラを授け、神の形について瞑想する方法、彼の会いたい神が誰であれ、心をその神一点に集中する方法を説明しました。男の子は、ナーラダが言ったことを全て信じ、それらを実行し、それらに従い、何でも実践しました。

そのようにすれば、神は彼が瞑想していた形で必ず現れます。ヴィシュヌ神やナーラヤナ神など、どのような神も必ず来られます。神は来ざるを得ないのです。つまり、私たちは悟りや神のビジョンと呼ばれるものが何かを知り、分析できます。心が神の形をとります。内側も、外側も、あらゆるところで心が神になります。やがて心は無くなり、神が現れます。そして神とは何かを理解します。
男の子は神のビジョンを得ました。神に望みを尋ねられましたが、全てを忘れてしまい、何も言うことができませんでした。神は、「わかりました。あなたの望みは叶います。家に帰りなさい。」と仰いました。王宮に戻ると、全てが彼の望み通りに進みました。弟はとても優しくて、父にも歓迎され、彼は皆に愛されました。そして、やがて彼は王になり、長い間王国を治めました。そして死後、北極星になりました。居場所が欲しいという彼の願いを神は

叶えられたのです。彼は座りたかったのです。ですから神は、彼が永遠に座ることを許されました。
そこは変わることのない不変です。変わることは不可能です。占星術やその他の科学によると、北極星であるドゥルヴァは宇宙の中心です。宇宙は変わり続けますが、中心は決して変わりません。

相対的知識の変化

私が話しているのは、知識がどのように増減するかです。私はこの物語を知っていたので、星々は偉大な聖者やドゥルヴァのような賢者だと考えていました。全ての偉大な聖者やリシ達は空に座っているのだと思っていました。なぜ彼らは落ちてこないのかと言うと、屋根の上に座っているからで、空は純粋なガラスで作られた透明な屋根なので、地上にいる私たちからも見える。キラキラと光るのはなぜかと言うと、天空は寒いので、それぞれが暖炉を持っている。ですから、星々はきらめいている。これが私の理解でした。
今の私がこの話を信じられると思いますか？

このように相対的な知識は変化します。今の私はこの知識が何の役にも立たないことを知っています。
宇宙は心の創造物です。それは夢のようなものです。私が考えていたのは、聖者や賢人たちが暖炉の近くに座っていて、彼らは落ちてこないということでした。
あなたの相対的な知識はこのように変化します。刻一刻と、より明確な知識を得て、私たちの知識は変化するのです。私たちが話すこと、見ること、感覚によって知覚すること、理解することは、何であれ、全てそのような相対的知識です。それは常に多数の中か、2つのものの間にあるのです。そのため、変化します。

絶対的真理を語る唯一の言語

とは言え、私たちが絶対的なもの、2つ目のない1つについて、議論し、話し、分析しようとする時にも、この知識から始めるしかありません。他に方法はありません。
沈黙は、真理について説明できる唯一の言語です。しかし、それを表現したいと思ったら、沈黙は無くなります。表現されたものは全て、相対的なものです。

ヴェーダーンタのプロセス

ヴェーダーンタは3つのプロセスから始まります。教えられたり聞いたりしたことについて、熟考し、結論を得なければなりません。そしてその結論に留まり、それについて瞑想しなければなりません。これがヴェーダーンタのプロセスです。
これが始まりで、これが終わりです。あなたは、始めたところで終わらなければなりません。あなたが何を聞いても、完璧で誠実な熟考のプロセスであれば、必ず結論に到達します。そして、それは「無」で終わります。
全てが忘れられ、そこに議論はありません。分析も、熟考も、瞑想も、何もそこにはありません。つまり、そこでは全てが静かです。何も表現されません。

この世界は絶対的存在の顕れ

それが、私が先ほど話したことです。誰もいない場所に1人で座っている時には、表現する必要はありません。
そこに2人目が来たら、自分を表現しなければなりません。

このことに基づき、この世界は多様で、変化していますが、絶対的存在の顕れだということを当然のこととして受け入れなければいけません。この結論に至るべきです。
あなたが暗い部屋に１人で座っている時に、誰かが来たとします。「誰かいますか?」と声がします。誰の姿も見えませんが、声や音が聞こえます。「誰かいますか?」と聞かれた時に、初めて表現の必要が生じます。
そうでなければ、表現の必要はありません。

私たちは何も理解していない

熟睡している時、あなたは何も表現しません。2つはなく、1 つしかありません。無知という暗闇の下にあるので、何も見えず、何も知りません。夢を見たり、起きている時とは違う状態です。熟睡中に表現はありません。
同様に、１人でいる時にも表現の必要はありません。つまり、2つの可能性があるところに、表現の可能性があるということです。もし2つ、3つ、4つ、さらにもっとたくさんあれば、混乱、幻覚、幻影などが始まります。
このように、私たちは何も理解していないのです。
自分はとても知識豊富で、多くのことを知っていると主張しても、あなたの知識はこのようなものです。
私たちが理解していること、知っていることは何の役にも立ちません。そして、それらが全ての問題の原因です。これが完全に削除されると、初めて真の知識が幕を開けます。
ですから、ヨガ・スートラでは「考えるのをやめなさい」と言っているのです。知識を捨ててください！ 全ての知識と全ての表現を、です。
「私は農業と科学の2つの博士号を取得しました。さらに哲学も。私は立派な人物です」と言っている人は、何の役にも立ちません。立派な人物とは、何の役にも立たないことを意味します。

反対のペアから議論を始める

私たちは何かを議論する時、常に反対のペアから始めなければなりません。プラパンチャやニシュプラパンチャについて議論しましたね。プラパンチャが無ければ五元素はなく、その混合もありません。何が残るのでしょうか？どうなるのでしょうか？空間も、空気も、火も、水も、土もない時に太陽は見えるでしょうか？惑星や彗星は見えるでしょうか？宇宙に何か見えるでしょうか？そこには何もありません。ですから、何も欠けることはなく、何も存在しません。このように私たちは絶対的な存在に辿り着き、静かになるのです。疑問の余地はありません。

全体と部分についての質問への答え

自分が全身だと知っていれば、部分を知る必要はありません。一部分は全体を知ることはできません。部品は本体が何であるかを理解できませんが、本体はそれを理解できます。体は手足や部分の形で自分を表現します。体とは部分の集合体を意味します。車体は様々な部品の集合体です。人間の体も車体と同じです。多くの部品がしっかりと繋ぎ合わされたものを体と呼んでいます。全ての部分は互いに関係しています。
全体を体と呼びます。車体、人間の体、信託（の体）、または会社（の体）等、みな同じことです。手足や全ての部分を合わせて1つの体です。
私たちが見るのは部分だけです。 車の一部は見えても、車全体を見ることはできません。全体ではなく、部分だけしか考えられません。私たちは、全体について話すことも、理解することも、見ることもできません。

哲学的言語についての質問への答え

私たちは様々な言語を理解しなければなりません。哲学の言葉では、掛け算は割り算です。掛け算は割り算をする時にしかしません。わかりますか？割り算をしなければ、掛け算はできません。掛け算は割り算なのです。もちろんこれは哲学的な意味で、数学的な意味とは異なります。

また、哲学的には単数形の言葉はどこにもありません。文法的には、単数形があり、複数形があります。哲学の言葉を話す時には、複数形でしか話しません。あなたが何を見つけようと、そのことについて話したり、知ったりしたことは、多数の中の1つです。ですから、複数形です。1つのものは見えないので、見えるものは全て複数形です。

そして哲学的には、（男性もいる会場ですが）ここに男性はいません。全員女性です。違いを感じないでください。私たちは全員女性です。もちろん哲学的な言葉での話です。哲学的な言葉の視点は、かなり違うのです。

正反対の両方について語る

ヴィディヤがなければ、アヴィディヤは存在しません。無知がなければ、知識はありません。ですから、知識について語りたいと思った瞬間、まず無知について語らなければなりません。なぜなら、無知がなければ、知識はないからです。夜がなければ、昼はありません。絶対的な空間に昼と夜があるでしょうか。それは太陽系の一部の惑星や準惑星上にだけあります。太陽に昼と夜はありますか？

太陽自体が光輝いています。光です。そこに昼と夜や二元論があり得ますか？

このように私たちは、何を議論する時にも、正反対の両方について語らなければなりません。

ギーターによる真の賢者

私たちは知識と無知、昼と夜、闇と光等について何度も議論してきました。光について語る時に闇とは何かを理解しなければなりません。闇について話す時には光とは何かを理解しなければなりません。両方を一緒に見なければなりません。

それがギーターで言われています。両面を見る者は、本当の意味で見る者である。不在と存在を全体として知る人は、真の見る者であり、理解力のある人です。彼は本物の賢者です。無知と知識とを全体として知っている人は、真の賢者です。多くの箇所で、ギーターはこれらの例を挙げています。

ギーターでは全体を通じて、クリシュナ神が至る所で私たちにこの秘密を説いてくださっています。あなたは対の両方を全体として受け取らなければなりません。そして総合的な1つの角度から全体を見る必要があります。

そうすれば、あなたは本当の知者になります。そうでなければ、あなたは本当の知者ではありません。あなたは部分的に知っているだけです。全てを知っているのではありません。どんな時も私たちは両方を受け取らなければなりません。

私たちはどのように決断するのか？

どの国の司法制度でも、裁判官が判断を下す時には、両者の意見を聞かなければなりません。証人を立てる場合には、両側から出さなければなりません。しかも一人では不十分で、二人の証人が必要です。常に両側から話を聞き、議論し、対処します。もし2つがないなら、どこに決断があるのでしょう？決定の必要性はどこにあるのでしょう？決定は、反対のものがある場合にのみ必要です。私たちの知性は、いつもこれを大変スムーズに

行うので、私たちはそのことに気づきません。
ここにハヌマーンの絵があります。顔を見た瞬間に、私たちは首や頭や耳など、あらゆる部分を比較します。目は鼻とは違うものとして見、顔は体とは違うものとして見ています。そうですよね？知性が自動的に働きます。それは電子的なプロセスです。自然の働きは、電子的なプロセスに他なりません。全てはひとりでに進行します。それが自然の素晴らしさです。
私たちは常に比較し、関連付け、両方の側面を見ます。これが自然の法則です。常に2つを取り、何が正しく、何が間違っているかを決定します。何が正しいか？何が間違っているか？という2つの決定です。
決定も一点に集中したものではありません。決定にも両面があります。彼は正しい、彼は間違っている、と両方を見ています。これが、私たちが判断を下す方法なのです。

この世界の基本は二元論

ですから、絶対的なものを知るには、世界は誤りで存在しないこと、そして真実が存在することを知らなければなりません。私たちの人格、理解力、心、知性等、私たちの構成物が何であれ、全てはこのことを基本に作られているのです。つまり、二元論です。これを手放すことはできません。これを手放したら、あなたは絶対的で完全な沈黙状態になります。私はそこに存在せず、あなたもそこにいません。彼も、彼らもそこにいません。複数形も、単数形も、これもあれも、そこには何もありません。静寂だけがあります。絶対的な静寂地帯です。
それが存在しないとも言えないし、存在するとも言えません。何もありません。黙って、ただそれを楽しんでください。 はちみつをなめたら、それをただ味わうだけで、表現する必要はありません。

二元論の議論をした後

私たちは、全ての二元論的な反対語について議論してきました。この議論は必須です。全ての対立について、このようにして議論を尽くすと、結論に達します。人はまずこの世界を受け入れ、それから放棄するのです。
放棄には、犠牲、慈善活動、苦行等の様々な方法があります。その実践は、心や存在自体を浄化し、その人を清めます。浄化とは、メニネス(manyness)を放棄して、ワンネス(oneness)を手に入れることです。
皆それが浄化の基本的な意味です。
純粋とは1つを意味します。不純とは、組成物や化合物や混合物を意味します。混合物は純粋ではありません。純粋なものは1つです。純粋な牛乳は、水などの混ざり物のない牛乳です。純粋な物はワンネスを意味し、不純な物はメニネスを意味します。私たちはメニネスの中、つまり不純な世界にいます。ですから、浄化の必要があります。つまり、ワンネスの達成です。哲学の言葉で言えば、結合、ヨガ、霊的な交流とも言えます。
それこそが最高の達成です。
結合していないものだけが、結合できるでしょう？ヨガはそう言っています。この結合は、二元論に始まり、一元論で終わります。異なる種類の全てのヨガで、世界中どこでも、同じ方法です。2つから始めて、1 つで終わります。ヴェーダーンタであろうと、サーンキヤヨガであろうと、バクティヨガ、カルマヨガ、タントラヨガ、マントラヨガ、ウパーサナ等、多くの種類の方法がありますが、どれも同じです。好きな方法をとってください。
どの方法でも、2つから始めて 1 つで終わります。それが結論です。

二元論を議論する理由

なぜ、私たちはこのような二元論的な対立を議論するのでしょうか？ここから始めて、絶対的な静寂で終わるためです。世界が何かを知ることができるのは私たちだけです。あなた、私自身、彼自身、彼、彼女など、どのような個々の存在も、自分自身を浄化したいのなら、それは2つに始まり1つで終わります。
自分自身を浄化するには、様々な方法があります。まず、自己犠牲です。そして皆と分け合う慈善活動があります。全てのシャーストラ（聖典）に様々な言語で同じことが記されています。

聖典イーシャ・ウパニシャッドの教え

イーシャ・ウパニシャッドには、「*イーシャワースィヤミダグンサルヴァム　ヤットキンチャ　ジャガティヤーム　ジャガットゥ　テーナッ　ティヤクテーナ　ブンジーター　マーグリダフ　カッスィヤスウィダナム*」（移ろいゆくこの世では、全てが神に包まれながらも移ろいゆく。自己放棄を実現し、真我の意識に強く在れ。他人の富を求めるなかれ。）と記されています。何が見えようとも、そこに何があるにせよ、それは全て神の顕れです。神だけです。
神だけがあらゆるところに遍在しています。見えるものも、見えないものも、全てが神のみです。神によって満たされ、神によって示されています。それは神の遍在です。

「*テーナッ　ティヤクテーナ　ブンジーター*」（自己放棄を実現し、真我の意識に強く在れ。）あなたはそこにいます。誰がこれを言っているのでしょうか？誰がこれを聞いているのですか？あなたはそこにいるのですから、あなたもまた神です。そして、そこにいる他の存在が何であれ、それらもまた神の顕れです。
ですから、もし私がそこにいて、私のものがそこにあるなら、私も私のものも、どちらも神です。何であれ自分の物だと思うものを楽しむ時は、他の人と分かち合うことによって楽しまなければなりません。
一人では楽しめません。あなたは一人ではありません。あなたは決して1つではありません。あなたは多数なのです。
ですから、あなたは全てを多くの人やものと一緒に楽しまなければなりません。皆とです。
この基本原則に立てば、あなたは占領も、保有も、他人の権力を奪うことも、他人の領地に入ることもできません。他人の財産を求めることもできません。
ここで、「もし全てが神だと言うなら、私や他の人々はどのような存在なのか」という疑問が浮かびます。「私」とか「他者」とは何なのでしょうか。なぜ、「*マーグリダフ　カッスィヤスウィダナム*（他人の富を求めるなかれ。）」と言うのでしょうか？
私たちが楽しむ時、私は楽しむ人であり、自分のものを楽しんでいると知っています。全てが神であると言う時、全ては神の存在です。つまり、あなたもその中にいるのです。この考えがしっかりと固まるとそれは定着し、「私」とか「私のもの」という考えを持つことがなくなります。「私」と「私のもの」は違います。その違いが消え去ります。違いという考えは無くなります。
何があるにしても、常に同じものであるならば、違いについての疑問は生じません。たくさんのものがあるように見えるかもしれませんが、その時にも、全ては神であるというあなたの確信、結論を忘れないでください。
「私」とか「私の」とか、他の人と私は違うとか、他人の財産や持ち物を獲得しなければならないといった考えを持ち出さないでください。このような考えを心に入れてはいけません。これが「*マーグリダフ　カッスィヤスウィダナム*（他人の富を求めるなかれ。）」を実践する方法です。
これは警告です！警鐘を鳴らしています。注意してください。そのような考えが入り込むのを許さないでください。

結論に達すると、自動的にプロセスが開始される

全ての二元論的な対立について議論し、慈善活動や自己犠牲、苦行等、日々の精神的な修行の実践によって浄化し、徹底的なヴァイラーギャ（放棄）を行い、グルである偉大な賢者の口から出た言葉について熟考し続けるならば、私たちは結論に達するのです。

すると、ゆっくりと、自動的にプロセスが開始されます。何のプロセスでしょう？

浄化とは放棄を意味します。この言葉を注意深く理解してください。 それぞれの単語には、副次的な意味があります。放棄する、拒絶する、という時、それはまた離欲、ヴァイラーギャを意味します。それは放棄でもあり、犠牲でもあり、浄化でもあります。なぜなら、あなたはメニネスを手放し、ワンネスに向かって進んでいるからです。

つまり、単語にはたくさんの副次的な意味があるのです。これを理解する必要があります。

手放した時にだけ、受け入れられる

このようにして、私たちは1つのことを実践すると、それと並行して他のことも実践します。

聖者ヴァシスタは、離欲が進むと、偉大な人々の言葉を聞き、それについて熟考し、結論に達する、つまり瞑想的な状態がやって来ると言います。自己努力、葛藤、実践によって、ゆっくりと、あなたは放棄し、世界を手放します。

放棄とは、「全てを投げ出します！」と周りの人々に宣言することではなく、自動的なプロセスです。ゆっくりとワンネスを育んでいくと、メニネスを手放すのです。そのようにメニネスを手放すことを離欲と呼びます。わかりましたか？これは必然的なプロセスです。

前進する時、あなたは目的地に近づき、出発点から遠ざかっています。両方が一緒に起こっています。あなたは何かを受け入れた時に、何かを手放しているのです。そうした時にだけ、何かを受け入れることができるのです。

外向性と内向性の結末

外向的であるとは、世界を受け入れることを意味します。そして、内向的であるということは、外向性を放棄し、中心に向かって進むことを意味します。別の角度から見ると、これまで議論してきたように、内向性は外向性としても知られています。両方を総合的に見るのです。

あなたの外向性はどの程度ですか？最大の限度はありますか？無制限ですか？

無限とは、最大よりも大きいものという意味です。内向性の限度は？それも無限です。最小よりも小さい。

つまり、どちらも同じです。外向性の終わりは内向性の終わりです。

このようにして、私たちは1つに辿り着きます。